しまねの社会教育だより

島根県立東部社会教育研修センター
vol.38

photo この夏『君が』『地域が』… 変わる （浜田市弥栄町・杵束まちづくりセンター）

特集 しまねの社会教育の広がり
～「開かれ、つながる社会教育」の実現に向けて～

2024. 2月号

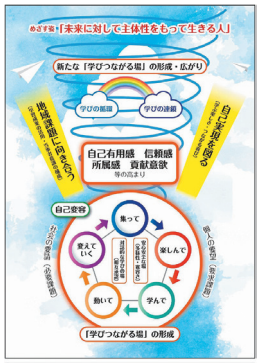
contents

■ 第45回中国・四国地区社会教育研究大会島根大会　報告
■ 学びがチカラに‼〔安来市十神交流センター　大驛 杏奈さん〕
■ わがまちの社会教育の実践紹介　〔西ノ島町・雲南市〕
■ しまねの社会教育 ×「パラスポーツ」
青少年の家（サン・レイク），少年自然の家

特集　しまねの社会教育の広がり

しまねの社会教育では、「未来に対して主体性をもって生きる人」を目指す姿として掲げています。そのための有効なプロセスとして「しまねの社会教育流儀（集って・楽しんで・学んで・動いて・変えていく）」を大切にしています。このプロセスに丁寧に時間と手間をかけることで、楽しみながら学び・活動するなかで自己有用感やさらなる貢献意欲が高まると考えています。そして、また新たな「学びつながる場」が形成され、さらに広がっていくことで、上記の姿に育まれていくことを目指しています。

（参考「しまねの社会教育で大切にしたいこと」社会教育課発行＊詳しくはURLへ↓）



「未来に対して主体性をもって生きる人」を育むプロセス（イメージ図）

今回、県内各地で社会教育について学んださまざまな立場の方々にお話を伺いました。研修という「学びつながる場」に集って楽しみながら学んだ方々が、その学びをどのように生かそうとされているかを紹介します。

ファシリテーター養成講座を受講された方々

森原　千尋さん

中山農園（株）

私の会社は、主に養蜂を営んでおり「人間だけでなく、生き物も大切にする持続可能な自然環境」を経営の方針としています。事業でかかわりのある方々との対話を重ね、連携しながら業務を進めていくために、話し合いの場を進行するスキルを高めたいと考え、「ファシリテーター養成講座」を受講しました。

講座から「誰もが安心して話し合うことのできる雰囲気・場づくり」の大切さを実感し、その進め方について学びました。お互いの損得でなく、誰もが公平・平等に対話していくことはとても大切なことなので、日ごろから心がけています。

環境による影響なのか、蜂は年々減っている状況にあります。自然環境の保全というなかなか答えの見えない課題に対して、みんなで知恵を出し合っていく必要があると考え、全国各地のシンポジウムに参加して一緒に学んだり、様々な人とつながって情報交換をしたりしながら取組を進めています。

佐藤　みどりさん

LGBT講師・コーチ

私はLGBTの方を含めたすべての人が生きやすい地元づくりのために、講演やオンラインによるコーチング活動を行っています。そうした活動の質をさらに高めたいと思い、「ファシリテーター養成講座」を受講しました。

講座では、「参加型学習」という楽しく、体験的に、互いに学ぶことができる学習法について学びました。そこで学んだ具体的なスキルや心構えを講演にも取り入れています。具体的には、講演中に参加者が意見交換できる時間を充実させたり、楽しい雰囲気づくりに努めたりするようにしました。また、これまでは自分自身が一方的に話すことが多かったのですが、参加者の様子を観察したり、「みんなで楽しく学ぶ」ということを大切にするようになりました。参加者の方の反応からこの「参加型学習」の手応えを感じているところです。

今後も、すべての人が生きやすい社会を目指し、講演会やコーチング活動を続けていきたいと思います。

齋ヶ原　祐司さん(左)
檜垣　　和美さん(右)

NPO法人てごねっと石見

[齋ヶ原さん] 私たちは、やりたいことがある人に“伴走者”としてかかわることで、つながりのある地域・まちづくりを目指しています。さまざまな話し合いの場づくりをする機会が多く、参加者同士で学び合うことの必要性を感じていたため、２人で「ファシリテーター養成講座」を受講しました。

[檜垣さん] 受講してからは、相手に「自分事として関心をもってもらう」ことを意識し、一方的に話すだけでなく活動を入れて相手の反応をみるよう心がけています。講座でアイスブレイクの有効性を実感したので、大学生や企業団体の話し合いの場面において、はじめに４マス自己紹介を取り入れました。次第に会場の雰囲気が和んでいくのがわかりました。

[齋ヶ原さん] 参加型学習の手法は、それぞれに特徴があるので、目的を明確にして準備・計画していく必要があることを学びました。活動の目的や内容、時間配分、準備物、事前・事後にすべきことなど、さまざまな視点から計画することで、すべきことがより明確になりました。そのうえで、参加者の様子をみながら臨機応変に対応することも大切にしたいと考えています。

[檜垣さん] 私も相手の言葉からその人の大切にしている思いは何なのかをキャッチしながら、丁寧な伴走を心がけていきたいです。

[齋ヶ原さん] 私は、中学校や高校でそれぞれ取り組んでいることに系統性をもたせたり、今進めているそれぞれの事業と事業を関連付けたりするなど、つながりのあるものにしたいと考えています。常にステップアップを図り、子どもにも大人にも自分のやりたいことが発見・実現できるよう伴走していきたいです。

～「開かれ、つながる社会教育」の実現に向けて～

社会教育主事講習を受講された方々

私の会社では、訪問看護・リハビリテーションに加え、「病や障がいを持った人も地域で繋がり続けることができる土壌をつくる」ことを目標に、地域交流食堂や地域マルシェなどの活動に携わっています。また、地域の方々の活動を応援するために、学校関係者や行政関係者に限らず、多様な関係者と日々対話を重ねることを心がけています。

社会教育主事講習で印象的だったのは、「曖昧さ」や「余白」を学びの土壌と捉え、未知の領域にも自ら「越境」していくという、社会教育士としての「在り方」でした。地域活動においても「曖昧さ」が残るなかでの挑戦や馴染みのない分野への「越境」が求められる場面が多々あります。全ては学びのチャンスと捉え、私自身が楽しみながら、地域のなかでの挑戦と学びを積み重ね、自身の学びを地域に還元していくだけでなく、学びと越境の姿勢を地域のなかにも広げていきたいと思っています。

山﨑　正則さん

(株) Community Care

「あすてらす」は、男女共同参画を推進する専門施設です。推進のために各市町村へ出向き、研修会を行っています。

社会教育主事講習［B］を修了した同僚の話を聞き、私も受講することにしました。「上から目線で『これが大事』と一方的に伝えるのではなく、一緒に考えることが大切」という考え方にとても共感しました。

男女共同参画を進めるサポーター（通称：キラ☆サポ）は、県内に127人います。なかには公民館やまちづくりセンターの関係者もいます。全県下で推進していくためには、関係各課・団体等とつながり協働的に取り組むことの必要性を感じています。各地で様々な取り組みがたくさんありますが、それらの目的を吟味していくと、当施設との共通項もきっとあると思います。

県内の社会教育施設とのつながりをもっと深め、お互いの目的意識を共有しながらそれぞれの専門性を生かした取組を広げていくことで、生き生きと暮らすことのできる暮らしやすいまちを目指していきたいと考えています。

漆谷 佑美子さん

県立男女共同参画センター
「あすてらす」
(公財)しまね女性センター

配置校である松江東高校では、「地域共創人育成Project」（行政や地域企業、大学と連携しながら、創造力や探究力を育むことを目指して行われている松江東高校の総合的な探究の時間のこと）のなかでプログラム検討、授業のサポート、生徒の伴走支援を行っています。また、松江東高校の業務とは別で、主に大学の先生や大学生に協力いただき、高校生の進路を考える際に役立つプログラムを企画し、県内高校生向けに展開しています。

社会教育主事講習では多くの学びがありました。そのなかでも、「楽しい」という視点を特に大事にするようになりました。大人が一方的に教えるのではなく、対話を通して一緒に考えていく、そういった場をつくることが大事だと気付きました。生徒とかかわる際や、何かプログラムを考える際には、これって楽しいかなと常に考えるようになりました。これからも、こうした心構えを大切に、様々な方と楽しくかかわっていきたいと思います。

池亀　雅人さん

県教育庁教育指導課
高大連携推進員

「新たな『学びつながる場』の形成・広がり」を目指して

取材した方々に共通していることは、講座・講習で得た学びを実践の場で生かすことで、多様な方とのかかわりのなかでまた新たな学びを得て、さらにそれを次に生かしたり、他へ広げようとしたりしていることだと思います。まさに「未来に対して主体性をもって生きる方々」だと考えます。

「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」（H30）では、「今後、地域において社会教育が本質的な役割を果たすためには、現状を見据え、社会教育の在り方を、より幅広い住民を対象に、より多くの主体との連携・協働により営まれるものへと大きく進化させる必要がある。」とあり、「開かれ、つながる社会教育」の実現が今後の方向性として求められています。

東部・西部社会教育研修センターでは、これからも参加型学習を活用した演習を取り入れた研修を行うことで、参加者同士が学び合い、かつ参加者同士の関係づくり・ネットワークづくりとなる「学びつながる場」を支えていきます。さまざまな方に参加いただき、“互いに”“楽しく”“体験的に”学び合いながら、しまねの社会教育のますますの広がりを目指していきます！

報告 第45回中国・四国地区 社会教育研究大会島根大会

しまねの社会教育の魅力満載！

令和５年11月16日(木)～17日(金)、島根県民会館を会場に第45回中国・四国地区社会教育研究大会島根大会を開催しました。県内外から約500名の参加があり、「しまねの社会教育」にも触れていただきながら、社会教育について熱く語る２日間となりました。

アトラクション
浜田商業高校郷土芸能部の皆さんによる圧巻の演舞

今回の研究大会のテーマは大きく二つ。

一つ目は、「子どもや若者と地域のつながり」。各市町村で行われるふるさと教育の中で、地域の伝統芸能について学ぶ子どもたちの姿を32枚のパネルにして見ていただくとともに、アトラクションで浜田商業高校の郷土芸能部のみなさんによる「大蛇（オロチ）」の演舞。

演舞後のインタビューを通して、高校生が感じている地域とのつながりや、地域への想いを参加者で共有しました。

二つ目は、「社会教育を開く」。地域づくりや福祉など、行政においては他のセクションが進める取組と社会教育がコラボレーションするとその取組がどうなるのか。それらの取組に対して、社会教育が果たすことができる役割があるのではないかということについて問題を提起するとともに、二日目の事例発表をもとに、参加者全員で考える機会としました。

基調講演

千葉大学名誉教授
明石要一氏による基調講演

「AI（人工知能）と共存する社会教育の可能性を探る」を演題に、千葉大学名誉教授明石要一氏の基調講演。参加者も時折大きくうなずきながら、身を乗り出して聞いたお話は、わかりやすく、講師も聴衆も終始笑顔の絶えない時間となりました。

パネルディスカッション

基調講演を受ける形で始まったパネルディカッション。島根県の様々なフィールドで活動を起こしたり、支援したりしている３名のパネリストの実践例をもとに、岩本悠さんのコーディネートのもと、「開かれ、つながる社会教育」をキーワードに話が進みました。

【パネルディスカッション登壇者】

○コーディネーター	島根県教育魅力化特命官	岩本　悠さん
○パネリスト	浜田市魅力化コーディネーター	大地本由佳さん
	益田市立高津中学校主幹教諭	田原　俊輔さん
	NPO法人KEYS　事務局長	藤原　睦己さん
○コメンテーター	千葉大学名誉教授	明石　要一 氏

「開かれ、つながる社会教育」の実現に向けて

人づくり・つながりづくりを進める分科会

大会２日目は、「人づくり・つながりづくりを進める分科会」。第１分科会は「地域づくり×社会教育」第２分科会は「福祉×社会教育」第３分科会は「子ども×社会教育」第４分科会は「社会教育委員×未来」と題し、各会場２つの事例発表が行われ、その事例をもとに参加者による熱い議論が繰り広げられました。

中国・四国地方からも４県の事例発表がありました。ここでは、それぞれの分科会で、島根県を代表して発表された事例の概要を紹介します。

第１分科会　香川県丸亀市

第２分科会　広島県北広島町

第３分科会　高知県高知市

第４分科会　鳥取県南部町

第１分科会
「地域づくり×社会教育」

テーマ
「行政の取組を活用した地域の活性化」

海士町社会教育委員　永原　馨さん
御波地区　元平 優里さん
海士町教育委員会　勇木 香織さん

もともと過疎化が進んでいた海士町御波地区でしたが、近年子育て世代や若者が増加し、地域の行事が活発に行われるなど地域全体が活気づいています。行政が行っている様々な取組を活用して、地域がどう変化していったのか。実践の様子や地域の方の声をもとに発表されました。

第２分科会
「福祉×社会教育」

テーマ
「個性を育む創造プロジェクト」
～広げよう 深めよう 私の個性～
３Ｃ「夢」clubの取組から

雲南市３Ｃ「夢」club　土江 博昭さん
岡本 美緒さん
岡田 尚子さん

「Chance」!「Challenge」!「Change」!をコミュニケーションワードとして、社会教育の場で、雲南市内の特別支援学級の児童生徒を対象に体験活動を行っているのが３Ｃ「夢」clubです。支援が必要な子どもたちに特化したプログラムの実践の是非について議論し、現在５年目になります。３Ｃ「夢」clubの立ち上げの経緯や背景、目指す方向性、現状と課題について発表されました。

第３分科会
「子ども×社会教育」

テーマ
「楽しくないと始まらない、
楽しくないと続かない、
楽しいだけでは意味がない」

かわもとあそラボ　大村 信望さん
川本町教育委員会　吉本 悠真さん

「やってみたい！」から始まる楽しさを大事にした多様な活動。子どもたちは地域を舞台に何をして、どんな意味をつくっているのか。動画を交えた子ども達の活動の様子とともに、子ども達を支える地域の大人達の取組やその立ち上がりについて紹介されました。

第４分科会
「社会教育委員×未来」

テーマ
「社会教育について
一緒に学んでみ益鹿（ますか）」

益田地区社会教育委員連絡協議会
鹿野　浩一さん（益田市）
八坂美恵子さん（益田市）
吉永よしかさん（津和野町）
上山　豊和さん（吉賀町）

自分たちの思いで復活させた益田地区社会教育委員連絡協議会。常に地域の“今”と向き合いながら、“未来”へのつながりをつくる、益田地区（益田市・津和野町・吉賀町）の社会教育委員の取組を、各市町の社会教育委員の思いも込めて発表されました。

事例発表を聞き、熱い議論が繰り広げられました！

大会の運営においては、県内各市町村の社会教育委員が大活躍！

学びがチカラに!!

社会教育研修センターの研修で学んだことを、地域や現場での実践に活かしていらっしゃる方を紹介します

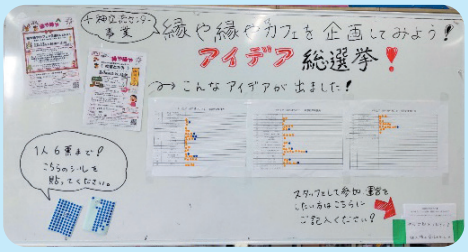
住民とともに　つくり上げていく

安来市十神交流センター　主事　大驛　杏奈 さん

交流センター主事となり３年目の大驛さん。これまでに「しまねの社会教育基礎講座」「ファシリテーター養成講座」を受講されました。それらの学びがどのように活かされているのでしょうか。今回は大驛さんが地域住民とともに展開されている事業「縁(えん)や縁(えん)やカフェ」での実践を中心にお話を伺ってきました。

■地域住民が主役の「縁や縁やカフェ」

「縁や縁やカフェ」とは、毎月1回、地域の方の学びの場、つながりづくりの場として様々な活動を行う交流センター事業の一つです。以前は交流センターの主事が企画･運営していた事業ですが、現在は地域の方が中心となり“お茶会”や“フリーマーケット”など様々な活動を企画・運営しています。



【投票を呼び掛けるホワイトボード】

どういった経緯で地域の方が中心となっていったかというと、まずは、「縁や縁やカフェの企画をしてみよう！～喫茶とかみでのんびりテーマトーク～」と題して、「縁や縁やカフェ」の活動内容を地域の方と決めていく会を開きました。そこで、集まった地域の方とワールド・カフェの手法を用いてアイデアを出し合いました。そこで実際に出た52個のアイデアについて、地域の方にも声をかけながら投票してもらい、話し合いを重ねました。投票結果の上位の活動を実際に「縁や縁やカフェ」の活動として行いました。こうした取組の過程で、積極的に参加してくださる地域の方が現在では中心メンバーとなって、企画・運営をしています。

■ねらい＋手法＋アレンジ＝学びの最大効果

なぜ、ワールド・カフェの手法を取り入れたかというと、正直なところ企画に困っており、アイデアがほしいと思っていたからです。また、協力者を増やしたくて、企画の裏側を知る人を増やしたいという思いもありました。そこで、ワールド・カフェの手法を取り入れました。ただ、いきなりこの手法を取り入れても地域の方が困ると思ったので、いくつか工夫をしました。一つ目に、役割を工夫しました。ホスト役（テーブルに残る人）と書記は地域の方ではなく、主事とセンター長で行いました。二つ目に、資料の工夫をしました。“おはなしのタネ”として、これまでの「縁や縁やカフェ」のアンケートを集約した資料を配布しました。そうすることでどのグループでも活発に意見交流する姿が見られました。

■“地域住民”から“仲間”へ

この実践から、地域には熱い思いをもった方がたくさんいて、そうした方たちへどんどん任せていく、委ねていくことができると分かりました。中心メンバーの様子を見ていると、生き生きと活動されたり、控え目だった方も「もっとこうしたら？」と自ら意見を出す様子もあったりと、次第に主体性が高まっているように感じています。さらに、地域の方が中心メンバーとなることで、地域の方同士の関わりも増えました。今後もこのような体制で、メンバーを増やしながら続けたいと思います。また、主事として、こうした方たちが活躍できるように、環境を整え、アシストに徹していきたいと思います。

【ワールド・カフェの様子】

この実践の素晴らしいところは、なんといっても地域の方の主体性を引き出している点ではないでしょうか。大驛さんの心構えや実践の中には多くの工夫があると思いますが、一つに企画段階から地域の方の声を拾い上げたことがあると思います。その際、参加者の様子を見極め、実態に合わせて参加型学習の手法をアレンジして取り入れている点がお見事です。今後の大驛さんのさらなる活躍を応援しています。

わがまちの社会教育の実践紹介

西ノ島町　西ノ島町放課後子ども教室の取組
～子どもの居場所づくりと体験的な学び～

しまっこ広場コーディネーター　江水　弘美
西ノ島町中央公民館インターン　亀井　李佳

西ノ島町では、毎週土曜日の午前中に「しまっこ広場」（放課後子ども教室）を開催しています。現在、小学校１年生から６年生の49名が登録しており、私たちサポーターと共に楽しく活動しています。

「しまっこ広場」は、子どもたちの居場所づくりとふるさとの「ひと・もの・こと」を体験的に学ぶことを目指して、竹竿釣りやダルマギク・オキタンポポの観察、海洋ゴミを使用したアート作品の製作、芋植え・芋ほり・芋を使ったクッキングなどを行っています。漂着ゴミを使用したイカのアート作りでは、ゴミを使いどのように表現するのか皆で話し合いながら、ペットボトルキャップで海の波と泡を表現しました。子どもたちが楽しんで前向きに取り組んでいる様子が見られました。

これらの活動を通して、老人会、大学生など普段関わることがない地域の人との世代を超えた交流ができ、つながりを感じる機会となっています。

今後も、子どもたちの居場所づくり・様々な遊びを含めた新しい体験活動を行い、「また行きたい。」と思ってもらえるような「しまっこ広場」を目指していきたいです。

国賀海岸での植物観察

漂着ゴミアートの製作

西ノ島町では、平日の放課後を放課後児童クラブ、土曜日を「しまっこ広場」、日曜日は家庭の日として子どもたちの放課後支援を行っています。江水さんには、コーディネーターとして地域の人材を活かした活動や得意な工作活動など、楽しく学べるプログラムを用意してもらっています。亀井さんは、新たなプログラムの開発や人材確保に努めておられ、子どもたちも大喜びです。今後も学校外で、楽しく学べる「しまっこ広場」に期待大です。

（西ノ島町教育委員会 派遣社会教育主事）

雲南市　「地域へ Go to ボランティア」
～自分を育ててくれた地域へ　中学生の「恩送り」～

雲南市地域コーディネーター（雲南市立木次小学校、木次中学校駐在）　青砥　晃子

雲南市立木次中学校では、生徒が地域を訪問する形でのボランティア活動を行っています。その名も「地域へ Go to ボランティア」。この取組は校区内の８つの地域と中学校が連携して行う事業です。

今年度で３年目となる取組で、当初は部活引退後の中学校３年生を対象としてスタートしましたが、１、２年生からも参加希望があり、今では何年生でも参加できるようにしています。参加者も年々増え、今年は延べ200人の生徒が地域行事等の補助、清掃活動などで活躍しています。

地域の方から「小学校の行事では顔を見るけど、中学校になったとたんに姿が見えなくなるよね」という声があったのが事の始まり。お世話になっている地域と中学生がつながるためにどんなことができるか、中学校の先生や地域の方と相談しながら始めたのが「地域へ Go to ボランティア」でした。今では地域の方から「今年もやるよね？」と声をかけていただいています。また、地元へ「恩送り」をする中学生の姿は、小学生たちの「自分も中学生になったらやるんだ」というロールモデルにもなっています。

今後も地域でのボランティア活動がきっかけとなり、中学生と地域住民が気軽に声を掛け合う関係でいて欲しいと思っています。

盆踊り夜市のサポート

ふるさと祭りのサポート

雲南市は中学校区を一つのコミュニティ・スクールとし、保幼こ小中（高）まで一貫した子育てを地域全体で支える気運が高まっています。この木次中学校の取組は、地域にとっては活気が生まれ、中学生にとっては「地域の一員として大人たちに認められる」という自己肯定感・地域への愛着の高まりにつながっています。青砥さんが大切にされている「恩送り」が地域全体に広がっています。

（雲南市教育委員会　派遣社会教育主事）

しまねの社会教育 × 「パラスポーツ」

青少年の家（サン・レイク）少年自然の家

このページでは、社会教育と各方面の関係者、機関等とのコラボレーションを紹介します。
第４弾は、社会教育施設における共生社会の実現へ向けた取組です。施設で障がい者スポーツ（文中では「パラスポーツ」と表記）の体験を通して学び、交流された方の様子について紹介します。

パラスポーツ体験と交流学習を通し考える
― 学校・地域・団体がつながる ―

県立青少年教育施設において、主催事業や宿泊研修等で「パラスポーツ」に取り組み、学校、企業や福祉・医療関係の団体、青少年育成事業に関わるコミュニティセンター職員のみなさんなど、体験を通して学びを深められた団体や家族がありました。研修をきっかけに、地域でのつながりや交流も生まれています。

サン・レイク

【家族でボッチャ】

サン・レイクでは、団体研修の他、様々な主催事業で、パラスポーツに親しんだり交流したりする機会を提供し、今年度12月までに約1,000人の方に体験いただきました。

12月に行なったわくわく体験講座「パラスポーツにチャレンジ！～みんないっしょに楽しもう！～」では、小学生とその家族20人がボッチャと車いすを使った鬼ごっこやラグビーに挑戦しました。車いすラグビーではトライをするおじいさんをお孫さんが一生懸命応援したり、ボッチャでは仲間同士で作戦を話し合うなどの活動を通して交流も深まったりしました。得点を決めるたびに歓声が上がり、パラスポーツを思いきり楽しんでいました。

参加者は、「競技用車いすに実際に乗ってみて、難しさや大変さだけでなく、助け合うポイントやスポーツとしての楽しさも体験してはじめて理解できた」と笑顔で話していました。また、「小さい子どもから高齢者、障がいのある方もない方も共に、だれもが安心して一緒に楽しめること、みんなが仲良くなれることが分かった」との声もありました。「パラスポーツ」のもつ力が人々を魅了し、そこから得られる学びや経験の価値の高さに関心が高まっています。

「所属する婦人会やスポーツ団体のみんなに紹介し、一緒に体験したい。」

「これから車いすバスケなど、パラスポーツを見る機会が増えるんじゃないかと思う。」

少年自然の家

【車いすバスケット体験】

少年自然の家ではパラスポーツを楽しむことを通して「だれもが安心・安全に楽しむ」スポーツのよさや大切さを実感してもらえるように、プログラム提供や相談支援をしています。今年度は教職員研修の中で先生方が実際に体験し、児童の学習としてどのように展開できるかを考えました。そして、総合的な学習の中で年間を通じて福祉教育をテーマに取り組まれた学校もありました。また、小学生や住民の方に対して、地域で障がい者スポーツに取り組んでいる方が研修の支援や交流をすることも始まっています。

江津市立渡津小学校では３年生が総合的な学習の時間で、11月までに３回のパラスポーツ体験をしました。そして、車いすバスケット名人として小川真生さん（益田市の車いすバスケットボールチーム「三光スイーパーズ」所属選手）と出会いました。少年自然の家職員のコーディネートのもと、先生方、小川さんそれぞれの想いを共有し、体験・交流の日の計画を練っていきました。子どもたちは体験後、「もっと仲良くなりたい、今後も交流したい。」と感想をもちました。だれもが安全に楽しく過ごすにはどうしたらよいか、普段の生活につなげられるよう担任の先生は学習を継続し、学習発表会で福祉についての発表をしました。11月末には小川さんを小学校に招待し、あらためて発表を見ていただきました。

このようにパラスポーツをきっかけに人々の心が動き、「だれもが安心・安全に楽しく過ごす」社会の実現の種が蒔かれています。

「真生君は車いすバスケットが上手で、すごくかっこよかった。一緒に過ごして本当に楽しかったから、もっともっと仲良くなりたい。学校にも来てほしいな。」

「子どもたちとの交流はとてもうれしく、もっとこれからもたくさん話をしていきたい。所属する団体を知ってもらいたい。」

東部社会教育研修センター

〒691-0074 出雲市小境町1991-2　サン・レイク2F
Tel.(0853)67-9060　Fax.(0853)69-1380
URL:https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu_shakaikyoiku/
E-mail : tobu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

西部社会教育研修センター

〒697-0016 浜田市野原町1826-1　いわみーる3F
Tel.(0855)24-9344　Fax.(0855)24-9345
URL:https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_shakaikyoiku/
E-mail : seibu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

第39号は９月末発行予定

「親学プログラム」
「地域魅力化プログラム」
※当センターホームページから閲覧・ダウンロードできます。